3390

乙 | 1708 | 博士（文学） | 2002/6/11 | 川尻　秋生 | カワジリ アキオ

川尻秋生氏　博士（文学）学位請求論文審査報告

「古代東国史の基礎的研究」

本論文は、日本古代地域史研究の方法を自覚的に切り拓きながら、具体的には古代東国地域の歴史と社会を中世をも視野に入れて考察し、論述したものである。その構成は、序章「古代東国史研究と本論の視角」、第Ⅰ部「古代東国論」、第Ⅱ部「平将門論」、第Ⅲ部「交通論」からなる。

序章では、本論文全体の方法と構想が述べられている。まず、旧来の中央対地域の図式、資史料の限定的な活用、歴史的視野の限界性などを深く反省した上で、本論文は、新出土の文字資料や平安時代の資史料などを広く活用しながら、地域対地域の関係、古代と中世の連続性、歴史学と周辺諸科学（考古学・文学・民俗学・地理学など）との連携、環境と歴史の関係などを重視する立場をとるものとする。

第Ⅰ部は、東国の地域概念とその歴史的性格の解明をおこなう。構成は、３章と付論からなる。第一章「坂東の成立」では、神亀元年ころの征夷軍編成にともない、まず陸奥国を含む「坂東九国」の概念が生まれ、ついで天平宝字年間になって、陸奥国を除く「坂東八国」の概念がはじめて誕生したとする。この間、坂東地域は疲弊したが、一方では、征夷を逆に利用して「征夷の家」を興す者もいたこと、坂東と東北との相互関係に注目すべきであることなどを指摘する。第二章「平安貴族がみた坂東―平将門の乱の影響を中心として―」では、１１世紀前半の平忠常の乱よりも１０世紀前半の平将門の乱の方がはるかに歴史的な影響力が大きかったことを実証し、平安貴族からみた「亡国」あるいは「武士」の坂東観は将門の乱を画期として生まれたこと、そして、そのイメージは中世にも継続することなどを論じる。第三章「古代安房国の特質―安房大神と膳神―」では、坂東のなかの安房国をとくに取り上げて、同国の特質性を論証する。すなわち、安房国造の王権に対する服属儀礼として鰒がニヘとして貢納されていたが、律令制の成立とともに、その形態は変化し、安房大神が膳職に御食津神として勧請されていき、天皇にその神が奉仕するという形をとるようになったとする。そして、同国安房郡が神郡になること、高橋（膳）氏と安房地域が緊密な関係にあること、「高橋氏文」には史料的価値が認められること、当該の鰒が「東国の調」に含まれる可能性があること、鰒が薬の価値を帯びていたことなどを総合的に考察する。本章最後の付論「大生部直と印波国造―古代東国史研究の一試論―」では、文字資料と考古資料との両面から７世紀中ごろの東国史を解明するケーススタディとして印波国造領域を取り上げる。すなわち、もともと印波国造は、印幡の地を本拠とする氏族（丈部直か）であったが、やがて隣接する埴生の地の大生部直が急速に台頭し、かつ勢力を拡大して、ついに印波国造を称するようになり、もとの印波クニの分割を申請し、埴生評を立評（別に印波評も立てる）させた。そして、このあらたな印波国造が龍角寺などの造営主体になったとする。さらに、この印波国造・大生部直の興隆の理由として、物部印葉連の没落、上宮王家以来の

王権に密着したミブネットワークの強化、水上交通の利点などを指摘する。

第Ⅱ部は、平将門の乱を通じて１０世紀の坂東を考察し、同乱の歴史的重要性を強調する。第一章「平良文と将門の乱―『大法師浄蔵伝』所引『外記日記』逸文の検討―」では、『大法師浄蔵伝』の諸本を詳細に調査したうえで、これまで不明な点の多かった平良文の実像を明らかにする。すなわち、良文は将門と敵対して、将門の旧領である相馬郡の地（原相馬御厨）を獲得したこと、のち争乱を起こした忠常は良文の孫にあたるが、その忠常の経済的・軍事的基盤は良文から継承したものであること、良文の所領はさらに中世の千葉氏・上総氏に継承されていくことなどを指摘し、鎌倉幕府成立への間接的な影響にも言及する。第二章「将門の乱と陸奥国」では、『九条殿記』逸文などの諸史料を詳細に分析し、将門の乱時の飛駅の経緯や内容を検討したうえで、将門が実際に奥羽出兵を企てていたこと、この点に関して『将門記』の記述には信憑性があること、坂東と東北との緊密な関係に注意しなければならないこと、将門のこのような行動計画は中世に至る坂東武士団の一般的な様態につながることなどを指摘する。第三章「平将門の新皇即位と菅原道真・八幡大菩薩―菅原道真・八幡神の託宣をめぐって―」では、菅原道真の霊魂と八幡大菩薩とが将門の新皇即位に向けて大きな役割を果たしたとする『将門記』の記事を多角的に分析して、同記事には信憑性があることを明らかにする。その理由は、坂東と菅原道真の子息たちとの緊密な関係、常陸介菅原兼茂の赴任、八幡神流行の実態、受領国司と任用国司との対立・矛盾などに求められるとする。第四章「平維良の乱」では、１１世紀初頭に房総で起きた平維良の乱を取り上げ、その歴史的性格を解明する。とくに、この乱は平忠常の乱の前提をなすこと、さらには、当該地域における平氏諸流の長い確執の歴史のもとで理解されなければならないこと、そして、その確執は追討・鎮圧を命令し、その勲功を賞する中央政府の戦略とも複雑にからんでいたこと、また、その過程で中世に至る武士団が生き残っていくことなどを指摘する。

第Ⅲ部は、地域間交通ないし都鄙間交通の観点から坂東周辺の歴史と社会を考察する。第一章「古代東国の外洋交通」では、中世東国の水上交通研究を視野に入れながら、古代においても東国の水上交通は盛んであり、歴史的に重要な役割を果たしてきたことを強調する。すなわち、国造制段階からすでに在地首長層による海洋交通がおこなわれており、その後、律令制下の国家による征夷の過程で、旧来の海洋交通や造船が国衙を介在として再編成されていき、さらに東北との関係において外洋輸送や造船は活発化したとする。第二章「古代東国の沿岸交通―中世との接点を求めて―」では、平安時代から中世に及ぶ諸資史料を活用して、坂東と宮都を結ぶ沿岸交通が盛んであったことを解明する。とくに、文学作品や古地図などに注目して、中世につながる主として平安時代の都鄙間水上交通の実態を浮き彫りにさせる。第三章「『香取の海』の水上交通」では、霞ヶ浦を中心とする水郷地帯である「香取の海」の水上交通を考察する。その過程で、「香取の海」という語の発生や概念、当該地域における国府・郡家と津の一体化、鹿島・香取両神宮の参詣ルートが水上交通に果たした役割、「榎浦」の遺称地などを解明する。

第四章「御牧制の成立―貞観馬寮式御牧条の検討を中心として―」では、宮都に貢上されて駒牽がおこなわれる馬を飼育する東国牧の制度について、その史料学的な検討をおこなう。すなわち、貞観馬寮式御牧条の逸文を確認かつ復原して、当該の牧制度が「弘仁式」にすでに規定されており、そのまま「延喜式」に継承されていること、ついで唐制との関係がみられることなどを指摘する。第五章「院と東国―院牧を中心として―」では、東国牧を具体的に検討したうえで、９世紀末から１０世紀初めにかけての間に、院牧から勅旨牧に再編成されたものが少なくないことを明らかにする。ついで、院牧時代の院司が東国に派遣されて、院牧が院の経済的・軍事的基盤になるとともに、その牧別当らには武人化する者もおり、群盗の発生や将門の乱にも影響を及ぼしたものとみる。

本論文の概要は以上のとおりであるが、その主要な特徴と成果についてまとめてみると以下のようになる。第一に、本論文は、これまで一方において法制史研究を積み重ねてきた論者の実証的な研究方法が充分に生かされており、また、未知の資史料を掘り起こして、書誌学的ないし史料学的な考証をおしすすめる方法が随所にみられ、その手法は新鮮であるとともに説得力に富む。とりわけ、第Ｉ部付論の１点の平城京二条大路木簡、第Ⅱ部第一章の「大法師浄蔵伝」諸書写本、第Ⅲ部第一章の『続日本紀』諸書写本、同部第二章の「日本図」や「津守国基集」を扱ったところなどは、その好例と言える。第二に、本論文は、活用する資史料を限定することなく、平安時代を中心とした古文書・古記録にはじまって、文学作品から古地図にまで至る広時代かつ広範囲の資史料が自在かつ適切に採用されている。とくに、第Ⅲ部において、その成果は顕著である。第三に、以上のような資史料の正確にして豊かな分析を踏まえた本論文は、自ずと旧説に甘んじることなく、あたらしい知見と歴史的視野を多く生み出している。論者がこれまで別途に校訂作業をおこなってきた『将門記』や『高橋氏文』の史料的信憑性をここで高める結果になるとともに、第Ⅱ部では平良文、菅原兼茂、平維良らの実像をはじめて詳細に明らかにした。また、第Ⅲ部第五章では、牧の存在を通じて院と東国との緊密な関係をあらたに指摘して、そのことが平安時代から中世にかけての東国社会に大きな影響を及ぼしたとみる。第四に、本論文の全体を貫く歴史認識としては、平将門の乱が歴史的に重要な意味を持つということ、坂東と東北には緊密な関係が常に存在したこと、平安時代を中心としてそれ以前の古代とそれ以後の中世とを連続的に見据えること、日本列島における水上交通を重視すべきこと、神祇信仰の有効性や社会集団の生活文化の実態を掘り下げることが重要であるということなどがあげられる。

以上のように、本論文には多くのあらたな特徴と成果が認められるが、一方では、若干の問題点を含むところもある。第Ｉ部第一章では、坂東の範囲から陸奥国が除かれた理由がなお不明確であるように思われ、第Ⅱ部第三章では、八幡大菩薩の性格、ついでそれと菅原道真の霊魂との関係をめぐる考察になお検討の余地があるのではないかと思われ、第Ⅲ部第一章の中心をなす『続日本紀』記事の解釈にはさらに別の可能性もあ

りうるかと思われる。全体としては、将門の乱の歴史的影響力を充分認めることに異論はないが、同時期の西国における藤原純友の乱との相乗効果や、将門の乱を生み出した東国社会がどのような歴史的変動期にあったのかという観点をもう少し顧慮してもよかったのではないかと思われる。また、あたらしい資史料の掘り起こしとその的確な考証が、ついで、その結果得られた新知見の数々が余りに新鮮で魅力的であるため、個々の成果をむすんで展開される歴史的論述がともすれば鋭利さに欠くとみられるところもある。しかし、この点はあくまで相対的な評価に過ぎない。

本論文は、これまで繰り返し述べてきたように、新資史料の発見とその鋭い考証、そして新知見の提唱を数多く含み、同時に、幅広い歴史的視野ないし構想を持つものである。もとより、上記のような問題点を若干は含んでいるが、そのことは本論文全体の基本的な価値をなんら損なうようなものではない。本論文は、平安時代を中心とする古代東国史、ひいては奈良時代以前と鎌倉時代以後を視野に入れた平安時代の地域間地域の政治文化や生活文化の研究と開拓に大きく貢献するものと考えられる。よって、本論文は、博士（文学）の学位を授与するに値する論文と認めるものである。

２００２年5月１４日

主任審査員　早稲田大学教授　博士（文学）　新川登亀男
審査員　早稲田大学教授　文学博士　菊池　徹夫
審査員　早稲田大学教授　博士（文学）　田中　隆昭